

地 理 歴 史

世界史 A、世界史 B

第 1 高等学校教科担当教員の意見・評価

世 界 史 A

1 前 文

平成 26 年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）本試験における「世界史 A」の受験者数は 1,422 名で、ここ数年で最少の受験者数であった昨年度の 1,491 名からさらに 69 名減少した。また科目選択率は昨年度と同じく 0.4% で、これも昨年度と同じく地理歴史科 6 科目の中で最低であった。今年度の平均点は 47.78 点で、地歴 6 科目の中では「日本史 A」の 47.70 点に次いで二番目に低かったが、昨年度の 46.67 点からは 1.11 点上昇した。

また、「世界史 B」との平均点の差は 20.60 点あり、昨年度の 15.76 点より更に広がったことになる。もっとも「日本史」「地理」における A・B 間の平均点差も決して小さいものではなく、受験者層の差もあり、一概に論じることはできない。また、「世界史 A」の受験者数が年々減少しているという現状を考えると、平均点の差だけで難易度を判断することは避けたい。

以下、問題についての細部にわたる検討は、今年度も従来と同様、次の観点をもとに実施した。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）に準拠し、「世界史 A」の目標を反映した問題であるか。
- (2) 「世界史 A」の教科書内容に即した問題であるか。
- (3) 「世界史 A」における基本的事項の理解と歴史的思考力を評価する適切な問題であるか。
- (4) 地域・分野・時代のバランス及び難易度・形式・表現などが適切であるか。

2 内 容・範 囲

(1) 試験問題の構成・内容

大 問	設問数	配 点	内 容
第 1 問	歴史上の人や物の移動（34 点）		
	A 4 問	12 点	人と物の交流
	B 3 問	10 点	ヨーロッパの進出とアメリカ、アフリカ
	C 4 問	12 点	19 世紀以降の移民と社会の変容
第 2 問	世界史上の戦争と戦後処理（33 点）		
	A 4 問	12 点	戦争目的と様式の変化
	B 3 問	9 点	近世以降の戦争の規模拡大と多様化
	C 4 問	12 点	戦争における占領と強制移住

第3問 世界史上の文化の交流や ^{でんぱ} 伝播（33点）			
A	4問	12点	東西交流と仏教の伝播
B	4問	12点	アッバース朝支配の拡大と文化交流
C	3問	9点	聖ヤコブ崇敬の広まり

第1問は「歴史上の人や物の移動」をテーマとし、アジア、アメリカ、アフリカ、オセアニアと世界諸地域に広く目を向け、時代の配分も適切で、全体として「世界史A」にふさわしい内容であった。

Aはアジア地域における船と貿易に関する話題をリード文とし、二枚の船の写真からそれぞれの名称とそれらが主に活躍した地域を選ばせ、歴史上の旅行者に触れ、朝鮮の政治史を問い、貨幣の歴史を確認させる設問であった。しかし問4 4の「交鈔」は記述した教科書が少なく、難解である。

Bは大航海時代以降のアメリカ大陸とその周辺地域及びアフリカの、時代を追った変容をテーマとしたが、アメリカ古典文明は教科書の記述が極めて少なく適切ではない。

Cは移民をテーマに、オセアニア地域の先住民に触れ、人の移動にともない世界に広まった農作物の原産地を問い、移民国家アメリカ合衆国における遅れてきた移民に対する政策に触れ、アフリカ現代史にも目を向けた良問といえるが、問9 9の「バナナ」は教科書に記述がなく、選択肢として不適切である。

第2問は「世界史上の戦争と戦後処理」というテーマで、古代から現代までの戦争を取り扱った。

Aは戦争の目的や様式に関するリード文をおき、古代から現代までの戦争を概観させ、特に近世以降では、労働力や女性の社会進出と戦争との関係についての理解を確認し、帝国主義時代の東南アジアの植民地分割状況を地図を用いて問う等、多面的・多角的に出題された良問であった。

Bは戦死者数を切り口として、近世以降の戦争規模の拡大と戦争の枠組みの複雑化・多様化を題材とした。各設問では、最初に16世紀の出来事を、次に18世紀の二つの戦争の枠組みを、最後に20世紀の二つの世界大戦にかかわる諸国の動向を問う、「世界史A」の主旨に適う出題であった。

Cは近現代の戦争における占領と強制移住がテーマの、「世界史A」に相応しい出題であったが、問10のa b両文にある「占領」は、単なる「侵出（侵入）」とは異なる概念であり、多くの受験者がこの言葉の判断に悩まされたことが想像され、かなり難解であったと思われる。

第3問は「世界史上の文化の交流や伝播」というテーマで出題された。三大宗教を取り上げた切り口は良かったが、「世界史A」としては、もう少し近現代史をからめた出題があつて良かった。

Aはリード文で中国における仏教の広まりを説明し、日本にも目を向けさせた。設問は、仏教自体に関する知識や、インドでの仏教以外の宗教の成立や伝来の順番を答えさせ、日本への文化の伝播について問うものであった。ユーラシアの文化交流をテーマとした良問であった。

Bはアッパース朝の拡大を背景とした文化交流がテーマで、地中海世界からインドへかけての諸地域の政治・文化事情を問い、ヨーロッパ文化にも目を向けさせる観点は良かった。しかし問8[30]の「シュルレアリスム」は、教科書での扱いが小さく、受験者になじみが薄く、選択肢として不適切である。

Cは聖ヤコブ信仰に関するリード文でスペインに目を向けさせた上で、イエズス会の創始者名を問い、十字軍の征服活動の成果を地図上で識別させ、イベリア半島を舞台とした絵画と建築について出題した。問11[33]はともに有名なものであり、写真を用いた出題も考えられたのではない。

(2) 地域別の出題数・出題率

地 域	平成26年度 出題数 (出題率)	平成25年度 出題数 (出題率)	平成24年度 出題数 (出題率)
ヨーロッパ・北アメリカ	13 (39.4)	12 (36.4)	19 (57.6)
東 ア ジ ア	5 (15.2)	6 (18.2)	5 (15.2)
南アジア・東南アジア	3 (9.1)	3 (9.1)	1 (3.0)
西アジア・北アフリカ	3 (9.1)	3 (9.1)	3 (9.1)
アフリカ・オセアニア・ラテンアメリカ	4 (12.1)	3 (9.1)	0 (0.0)
複 数 地 域 混 在	5 (15.2)	6 (18.2)	5 (15.2)
	33 (100.0)	33 (100.0)	33 (100.0)

「ヨーロッパ・北アメリカ」が例年どおり最多で、一昨年度の突出が是正された昨年度同様、40%弱の出題であった。その他の地域は中国・朝鮮・日本に目を向けた「東アジア」からの5題を最多とし、各地域それぞれ3～4題で、複数地域混在問題と合わせ、偏りのない出題数であった。

【複数地域混在の問題】(地域の分類は上の表に準ずる。)

「東アジア」「アフリカ」「南アジア・東南アジア」「西アジア・北アフリカ」－[2]

「全地域」－[13]

「西アジア・北アフリカ」「東アジア」－[26]

「西アジア・北アフリカ」「ヨーロッパ・北アメリカ」「南アジア・東南アジア」－[27]

「西アジア・北アフリカ」「アフリカ・オセアニア・ラテンアメリカ」－[29]

(3) 分野別の出題数・出題率

分 野	平成26年度 出題数 (出題率)	平成25年度 出題数 (出題率)	平成24年度 出題数 (出題率)
政 治 史	16 (48.5)	17 (51.5)	24 (72.7)
社 会 経 済 史	5 (15.2)	7 (21.2)	4 (12.1)
文 化 史	10 (30.3)	9 (27.3)	4 (12.1)
複 数 分 野 混 在	2 (6.1)	0 (0.0)	1 (3.0)
	33 (100.0)	33 (100.0)	33 (100.0)

第1問では「社会経済史」的の分野が多く、第2問では「政治史」が、第3問では「文化史」が

それぞれ中心に出題された。一昨年度と比べると「政治史」の減少と「文化史」の増加が特徴的で、昨年度と同じ傾向であり、適正なバランスであった。

【複数分野混在の問題】（分野の分類は上の表に準ずる。）

「社会経済史」「文化史」－1

「政治史」「文化史」－27

(4) 時代別の出題数・出題率

分 野		平成 26 年度 出題数（出題率）	平成 25 年度 出題数（出題率）	平成 24 年度 出題数（出題率）
古	代	2（ 6.1）	4（ 12.1）	0（ 0.0）
中	世	7（ 21.2）	3（ 9.1）	9（ 27.3）
近	世	4（ 12.1）	1（ 3.0）	5（ 15.2）
近	代	7（ 21.2）	10（ 30.3）	8（ 24.2）
現	代	4（ 12.1）	12（ 36.4）	6（ 18.2）
複 数 時 代 混 在		9（ 27.3）	3（ 9.1）	5（ 15.2）
		33（100.0）	33（100.0）	33（100.0）

昨年度と比べ「近代」「現代」の出題が減少し、複数時代混在問題が増加した。複数時代混在問題の内訳は下記のとおりで、「近代」「現代」は3問あるが、それを考慮しても、「近代」「現代」に特化した出題は昨年度より大きく減少し、一昨年度から昨年度への変化とは逆の動きとなった。

【複数時代混在の問題】（時代の分類は上の表に準ずる。）

「古代」「中世」－29 「古代」「中世」「現代」－25

「中世」「近世」－28 「中世」「近世」「近代」－1 「中世」「近代」－33

「近世」「近代」－16 「近代」「現代」－101321

3 分 量 ・ 程 度

本年度の出題数については、大問が3問、出題数が33問という状況であった。リード文をすべて精読して解答することを想定すると33問という出題数は妥当である。出題分野・時代の偏りをなくするためにリード文と設問の関連性が薄くなるという意見もあろうが、よく練られたリード文は受験者の世界史への興味・関心を引き起こし、それを踏まえた設問に取り組むことで、受験者は授業と同じように思考を多面的・多角的に深めて分析的な判断をおこなうことができるだろう。次年度以降も、同様に工夫をこらしたリード文と出題との関連づけをお願いしたい。

出題の時代区分において、昨年度と比べて近現代史の比率が減った。しかし基礎的・基本的事項を扱う出題が増えたこともあって、前年度並の難易度になった。出題内容については学習指導要領や教科書に沿ったものであり、適正であった。

以下に学習指導要領・教科書・高等学校授業での扱い方の観点から「適切な問題」と「配慮・工夫を要する問題」への分類を試みる。

【適切な問題】

第1問は「歴史上の人や物の移動」に関する出題であった。問66は、第一次世界大戦までに

は、ほぼ全域が植民地化されたアフリカで、独立を保った国の地図中の位置を問う出題である。地図中の選択肢からエチオピアを正確に選択することは、19世紀のヨーロッパの進出による「世界の一体化」を単に言葉の暗記ではなく、歴史地図を活用した空間的把握を重視するものであり、近現代史の扱いについて「客観的かつ公正な資料に基づいて歴史の事実に関する理解をさせるようにする」という学習指導要領の内容に沿った適切な出題である。

第2問は「世界史上の戦争と戦後処理」に関する出題であった。問2[13]は、労働力について、「苦力（クーリー）」が海外で労働に従事したことと、第一次世界大戦中には女性も軍需工場で働いたことの正誤判断を複数組合せで答えさせる出題である。「世界の一体化」や総力戦体制という歴史理解の大きな枠組みを、労働力の国際的移動や大戦下での女性労働力活用といった人々の生活実態のレベルで理解できているかを問う出題である。「世界の一体化」について、19世紀の労働力移動は、近世の黒人労働力の移動に比べて従来、出題が少なかったが、「中国や南インドから大量の移民労働者が世界の労働力市場に供給されたことに気付かせる」という学習指導要領解説の内容に沿った適切な出題である。また、女性の軍需工場労働は、総力戦体制の典型的事例である。両者とも、現代の世界が今なお当面する課題について、歴史をさかのぼって在り方を考察させる意欲的な出題である。問4[15]は、古代（重装歩兵）・近世（常備軍）・現代（無制限潜水艦作戦や核兵器）というように、戦争の様式が、社会の在り方・科学技術の水準に応じて変化してきた様子を理解しているかを問う出題である。時間的にも空間的にも歴史を大きく捉え、「歴史を通して、文明を考察させる」という「世界史A」の科目の基本的性格を踏まえた良問である。

第3問は「世界史上の文化の交流や伝播」に関する出題であった。問5[27]は、アッバース朝が存続した時期に起こった出来事を、時代や地域や分野の異なる基本的な事項から選択するという出題である。イスラームの地中海世界支配やヨーロッパへの圧迫に対するリアクションとして、カール戴冠および西ヨーロッパ世界成立という歴史の大きな流れの把握をもとにして、基礎的な歴史事象について時間的・空間的に理解しているかを問う出題である。前近代の歴史を、「その重点を諸地域世界の特質と相互交流を把握させることに置き、時間的にも空間的にも大きく捉えさせる」という「世界史A」の基本的性格を踏まえた良問である。

【配慮・工夫を要する問題】

第1問の問5[5]は、先住民の諸文明の生活史についての出題で、「アステカ王国での鉄器使用」、「インカ帝国のキープ（結縄）」というアメリカ古典文明での生活史についての記述の正誤判断を、複数組み合わせで答えさせる出題である。「インカ帝国のキープ（結縄）」については記述のない教科書もあり、さらに二つの正誤判断を両方とも正答しなければならない出題形式でもあるので、「世界史A」の設問としては、いささか配慮・工夫が必要であった。

第1問の問9[9]は、ジャガイモの原産地と、その原産地を同じくする作物の組合せを問う出題である。「大航海時代の世界」について、「農作物や家畜の大陸間での伝播、移動について触れる」という学習指導要領解説の内容に即した出題であるが、「バナナ」については教科書に記述がなく、さらに複数組み合わせの出題形式でもあるので、いささか配慮・工夫が必要であった。例えば「バナナ」の代わりに「胡椒」を選択肢にすることも可能であろう。そうすれば大航海時代のきっかけと「世界の一体化」の実態をセットにして問う良問になったのではないか。

第2問の問10[21]は、「イギリスのエジプト占領」・「ドイツのユーゴスラヴィア占領」の正誤判

断を複数組み合わせさせて答えさせる出題である。占領という概念は、高校生にとって流動的で漠然としていて理解や判断が難しいものの一つである。また「フランスやベルギーによるルール占領」と比べると、「イギリスのエジプト占領」や「ドイツのユーゴスラヴィア占領」という概念に生徒は馴染みがうすい。さらに二つの正誤判断を両方とも正答しなければならない出題形式でもある。これらの条件が重なった本出題は難問であった。

第3問の問8〔30〕は、イスラーム文明などとの交流を経て、イタリアで14世紀に興った文化運動を問う、世界史の基本的概念の名称を答えさせる単純な出題である。選択肢から「ルネサンス」を選ぶことは、基礎的な学力を身につけた受験者には極めて容易だろう。しかし、「シュルレアリスム」には別表記や日本名まで付加されており、選択肢間のアンバランスが生じている。そのため、この目立つ選択肢に惑わされた受験者がいたのではないかと推察される。選択肢は同じ基準で記述するように強く願う。

4 表 現 ・ 形 式

設 問 形 式	平成26年度 出題数（出題率）	平成25年度 出題数（出題率）	平成24年度 出題数（出題率）
正しい（適切な・該当する）ものを選択	28（84.8）	30（90.9）	29（87.9）
誤った（関係ない）ものを選択	5（15.2）	3（9.1）	4（12.1）
文章選択	11（33.3）	15（45.4）	18（54.5）
事項（語句）選択	7（21.2）	5（15.2）	4（12.1）
複数の事項（語句）の組合せ、並べかえの選択	11（33.3）	12（36.4）	9（27.3）
地図・写真・絵画・グラフなどを使用した設問	4（12.1）	1（3.0）	2（6.1）
合 計	33（100.0）	33（100.0）	33（100.0）

- ① 「世界史A」・「世界史B」の共通問題は設定されなかった。
- ② 誤答選択形式の問題は、昨年度から2問増えた5問であった。
- ③ 事項（語句）を選択する問題は、昨年度から2問増えた7問で、増加傾向が続いている。その分、文章選択の問題は、昨年度から4問減った11問で、減少傾向が続いている。
- ④ 複数事項（語句）の組合せや並べかえの問題は、昨年度とほぼ同じ11問であった。適切な出題数であったと考える。また、6択問題は昨年度から1問減って1問の出題となった。この形式の出題は選択肢の時代間隔を適切にとるならば、歴史の大きな流れを問うのには有効であるので、今後は昨年度並みに戻すことをお願いしたい。
- ⑤ 地図・写真・絵画・グラフなどを使用した問題は、昨年度から3問増えた4問であった。「世界史A」の授業では、多面的・多角的で柔軟な歴史の見方を養うために、様々な観点から歴史的事象を取り上げ、歴史を具体的に捉えることのできる地図・写真・絵画・グラフ・視聴覚教材などの資料を積極的に活用することが求められている。諸資料の読み取りをもとに思考・判断させる出題を今後もお願いしたい。

5 要 約

以上、各設問について個々に検討してきた。本年度もおおむね学習指導要領の目標に沿い、教科書の内容をよく踏まえた出題であった。大問は例年と同じく三つから構成され、第1問「歴史上の

人や物の移動」、第2問「世界史上の戦争と戦後処理」、第3問「世界史上の文化の交流や伝播」というオーソドックスなテーマであったが、リード文に工夫を施した作問がなされていた。

たとえば第1問では「2011年、長崎県鷹島沖」で発見された元寇で利用された船を話題にするなど日本近海で発見された沈没船の話題から東アジアの交易、通貨を題材にし、「19世紀以降の移民と社会の変容」では、取り上げられることの少ないオセアニアの先住民の歴史、アメリカの現代の人種差別問題にもつながる移民政策に関する出題がなされた。第3問では、受験者になじみのない「聖ヤコブ崇敬」からキリスト教、イベリア半島の話題が扱われ興味深い。いずれのテーマからも学習指導要領の主旨に沿う適切な出題が多かった。

全体の難易度は、細かな知識を要求される選択肢が若干あったが、おおむね学習指導要領の主旨を踏まえた適切な出題であって、昨年度と同程度に平易であったと思われる。

地域別では、39.4%がヨーロッパ・北アメリカから出題されたが、他地域からも3問以上は出題されており、世界の広い地域が対象とされていた。今後も地域的偏重が起こらないよう配慮を願いたい。

分野別の出題に関しても、昨年度から政治史偏重が改善されており、適正な問題数に落ち着いている。昨年度、出題されなかった複数分野に関わる出題もあり、今後も分野別偏重にならないよう引き続き配慮を願いたい。

時代別の出題では、昨年度、出題数3問(9.1%)と抑えられていた中世史分野が7問(21.2%)と激増し、昨年度、出題の多かった近現代史22問(66.7%)が11問(33.3%)と激減した。本年度は複数時代混在の出題が、昨年度3問(9.1%)から9問(27.3%)に増えてはいるが、近現代史を中心とする世界の歴史を理解させるという「世界史A」の主旨に合わせ、近現代史に特化した設問を増やしていただきたい。

出題形式については、ほぼ昨年と同じような構成であったが、地図・写真・絵画・グラフなどを使用した問題が昨年度は1問(3.0%)であったが、本年度は4問(12.1%)と増加しており、受験者の多様な思考力を多面的・多角的に試すためにも望ましいものである。今後も継続していただき、来年度は、表・グラフから正答を導き出す設問をお願いしたい。

問題数と配点は、今年度も大問3問・出題数33問であった。「世界史A」として適正な問題数であり、リード文を精読して解答を導き出すという高校側の指導にあったものである。唯一4点が配当される問題は、アフリカにおいて第一次世界大戦時に独立を保った国の位置を問う地図を使用した問題であり、適正な配当と評価したい。

リード文と設問との関連については、例年課題とされるところであるが、本年度は優れた文章が多く、受験者にとって興味深いものになっていた。ただリード文と設問の関連を深めるならば、第1問Aでは、元寇に関わる設問を、第2問Bでは、戦争被害者の統計グラフから考察する設問を加えても良かったのではないかな。

今年度の「世界史A」の問題は、近現代史に関わる分野が大幅に減ったものの、昨年度と同様に特定の地域・分野に大きな偏りがある問題が少なく、あらゆる地域・分野にわたる出題がなされた。大いに評価しうる点であり、今後も継続していただきたい。地図を利用した問題は3題出題されたが、「資料活用の技能・表現」を評価するために、来年度以降、グラフ・表を読み取る問題を最低限1題は出題することをお願いしたい。

最後に毎年リード文と設問の関連性が問われるが、今年度は無理につなげる設問が少なくなり、ここ数年の指摘が取り入れられてきたと評価できる。テーマ設定も良質で「世界史A」の基本的性格が反映されているので、今後は、時代別の出題数に特に留意していただき、受験者の努力が報われる出題をお願いしたい。

世界史B

1 前 文

今回の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の受験者は、本試験・追試験を含めて532,350名と、前回に比べて10,921名の減少となった。そのうち、教科「地理歴史」の受験者は375,266名であり、「世界史B」の受験者数は86,004名と、前回の90,110名から4,106名減少している。また、科目選択率で見ると「日本史B」の39.1%、「地理B」の37.4%に対して「世界史B」は21.9%となり、いわゆるB科目の中では、昨年同様、最も受験者数が少ない状況となった。特に本試験だけをみると、本年度の「世界史B」の受験者数は、最近5年間の受験者数の中で最も少ない。この状況は、いわゆる「世界史離れ」が更に進んでいることを意味しており、受験者数の推移をしっかりと分析し、少しでもこの状況に歯止めをかける必要があると思われる。

今回の「世界史B」本試験の平均点は68.38点と、前回に比べて5.95点上昇している。この平均点は、「日本史B」の平均点との差がプラス2.06点、また「地理B」との差がマイナス1.30点と、他のB科目との平均点の格差が小さく、バランスのとれたものであった。問題の難易度については、本年度は文章を選択させる問題が減少し、一方で文章中の空欄に適する語句または語句の組合せを答えさせる問題が大幅に増加したことから、易化の傾向が明確であった。

本年度から完全実施されている新しい高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）は、グローバル化により大きく変化する国際社会に対応できる人材を育成することを重視している。この方針に基いて具体的に「世界史B」においては、世界史と日本史の関連や、年表や地図その他の資料の活用が強調されている。世界史における日本の位置付けを理解し、文化の多様性・複合性や現代社会の特質を広い視野から考察させることにより、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きることでできる資質を養うことが求められているのである。この要求に答えるため、高等学校においてこれまで以上に生徒の興味・関心を高めるための指導上の工夫が求められることはもちろんであるが、それと同時に今後のセンター試験の出題においても、様々な問題形式により受験者の学力を多面的に測る作問を期待したい。

今回の「世界史B」では、前回と同様に「世界史A」との共通問題は出題されず、現行の学習指導要領に即した出題がなされていた。なお、今回は「現代史」分野、特に戦後史に関する出題数が大幅に増加した。それにもかかわらず平均点が上昇した理由としては、「西欧・北米」地域に関する出題や「政治史」分野に関する出題も増加したことや、前述の空欄補充形式の出題数が増加したことなどがあげられるだろう。

以下、問題についての細部にわたる検討は、今回も従来と同様に次の観点で行っている。

- (1) 学習指導要領に準拠し、「世界史B」の学習目標に適合しているか。
- (2) 教科書の内容に即し、それを逸脱しない出題であるか。
- (3) 世界史の基本的事項の理解と歴史的思考力を評価する適切な問題であるか。
- (4) 問題数・配点や出題の地域別・分野別・時代別のバランスは適切か。
- (5) 問題の難易度・形式・表現などが適切であるか。

2 内 容 ・ 範 囲

(1) 試験問題の構成・内容

大問	設問数	配点	内容
第1問	世界史上の危機 (25点)		
	A 3問	9点	唐の財政危機と反乱
	B 3問	8点	世界恐慌と植民地経営
	C 3問	8点	ヨーロッパの国際的地位の低下と地域統合
第2問	世界史における家族や社会集団 (25点)		
	A 3問	9点	遊牧民と農耕地域の社会
	B 3問	8点	インドにおける系譜の作成
	C 3問	8点	アメリカ合衆国の奴隷制
第3問	歴史上の国際関係 (25点)		
	A 3問	9点	16世紀のヨーロッパ
	B 3問	8点	戦争の違法化
	C 3問	8点	香港
第4問	世界史における過去の認識のあり方 (25点)		
	A 3問	8点	イスラーム教
	B 3問	8点	ソ連
	C 3問	9点	フランスにおけるユダヤ人迫害

(2) 地域別の出題数・出題率

年度・出題数 地域	平成26年度 出題数 (出題率)	平成25年度 出題数 (出題率)	平成24年度 出題数 (出題率)
西 欧 ・ 北 米	16 (44.4%)	12 (33.3%)	7 (19.4%)
東 欧 ・ ロ シ ア	2 (5.6%)	4 (11.1%)	4 (11.1%)
東 ・ 内 陸 ア ジ ア	7 (19.4%)	6 (16.7%)	11 (30.6%)
南 ・ 東 南 ア ジ ア	4 (11.1%)	5 (13.9%)	3 (8.3%)
西 ア ジ ア ・ ア フ リ カ	3 (8.3%)	6 (16.7%)	3 (8.3%)
中 南 米 ・ オ セ ア ニ ア	1 (2.8%)	2 (5.6%)	2 (5.6%)
複 数 地 域 混 合	3 (8.3%)	1 (2.8%)	6 (16.7%)
合 計	36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

昨年より「西欧・北米」に関する出題が増え、「西アジア・アフリカ」に関する出題が減少した。

(3) 分野別の出題数・出題率

年度・出題数 分野	平成26年度 出題数 (出題率)	平成25年度 出題数 (出題率)	平成24年度 出題数 (出題率)
政 治 史	24 (66.7%)	20 (55.6%)	23 (63.9%)
社 会 経 済 史	8 (22.2%)	8 (22.2%)	3 (8.3%)
文 化 史	3 (8.3%)	6 (16.7%)	9 (25.0%)
複 数 分 野 混 合	1 (2.8%)	2 (5.6%)	1 (2.8%)
合 計	36 (100.0%)	36 (100.0%)	36 (100.0%)

昨年より「政治史」の占める割合が増加し、「文化史」の占める割合が減少した。

(4) 時代別の出題数・出題率

年度・出題数 時代	平成26年度 出題数（出題率）	平成25年度 出題数（出題率）	平成24年度 出題数（出題率）
古代史	2（5.6%）	5（13.9%）	7（19.4%）
中世史	9（25.0%）	11（30.6%）	3（8.3%）
近世史	2（5.6%）	2（5.6%）	5（13.9%）
近代史	3（8.3%）	10（27.8%）	7（19.4%）
現代史	15（41.7%）	5（13.9%）	8（22.2%）
〔うち戦後史〕	9（25.0%）	1（2.8%）	5（13.9%）
複数時代混合	5（13.9%）	3（8.3%）	6（16.7%）
合計	36（100.0%）	36（100.0%）	36（100.0%）

中世（5 c～14 c）・近世（15 c～17 c）・近代（18 c～19 c）・現代（20 c）を目安とする。

昨年より「現代史」に関する出題が大幅に増加し、「近代史」の占める割合が大幅に減少した。

(5) 出題形式別の出題数・出題率

年度・出題数 設問形式	平成26年度 出題数（出題率）	平成25年度 出題数（出題率）	平成24年度 出題数（出題率）
正しい（適切な・該当する）ものを選択	31（86.1%）	32（88.9%）	30（83.3%）
誤った（関係ない）ものを選択	5（13.9%）	4（11.1%）	6（16.7%）
文章選択	8（22.2%）	18（50.0%）	14（38.9%）
事項（語句）選択	9（25.0%）	5（13.9%）	4（11.1%）
複数の事項（語句）の組み合わせから選択	19（52.8%）	13（36.1%）	14（38.9%）
地図・写真・絵画・グラフ・年表などを使用	5（13.9%）	4（11.1%）	4（11.1%）
合計設問数	36（100.0%）	36（100.0%）	36（100.0%）

- ① 主題を設定した大問が4問という形式に変化はなく、問題数の36問は今年度も踏襲された。
- ② 昨年度に続き「世界史A」との共通問題はなかった。
- ③ 誤ったものを選択する問題は、昨年度に比べ1問増加して5問であった。
- ④ 事項（語句）選択形式の出題数は、昨年度に比べ4問増加し9問であった。
- ⑤ 地図・写真・絵画・グラフ・年表等を使用した形式は、昨年度に比べ1問増加し5問であった。
- ⑥ 6択問題は昨年度と同じく2問であった。

3 試験問題の分量・程度

今年度の試験問題では、地域別で「西欧・北米」に関する出題が増え、「西アジア・アフリカ」からの出題が減少した。また時代別では「現代史」からの出題が大幅に増加し、その中でも特に戦後史からの出題が多かった。全般的には基本的事項を内容とする出題が多く、問題としては標準的であり、出題の難易度は昨年度より平易なものとなった。試験時間と分量（設問数36問）については適切であったと考えられる。

以下、試験問題の分量・程度について「世界史B」の教科書・学習内容などの視点を含めながら大問ごとの検討を行った。

第1問 世界史上の危機について

世界史上の危機に関連して、Aは唐の財政危機と反乱、Bは世界恐慌と植民地経営、Cはヨーロッパの国際的地位の低下と地域統合についてのリード文をもとに出題されている。政治史に関する出題が多く、全体的な難易度はやや易しい。

問1 唐末の反乱と節度使について、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。

いずれも基本事項であり、容易に解答できる。

問2 世界史上の危機について、誤っている文を選択する問題。中東戦争の経過について正確に理解している受験者は多くないかもしれないが、①②④がいずれも基本事項であるので、③が誤りであることは容易に判断できる。

問3 両税法についての二事項判別問題。a・bともに基本的な事項であり、容易に解答できる。

問4 東南アジアで起こった出来事を年代の古い順に並べる問題。aのラタナコーシン朝については、チャクリ朝やバンコク朝という呼称も併記したほうが、受験者には判断しやすかったかもしれない。

問5 ジャワについて、誤った文を選択する問題。③のワヤンについてはやや細かく、判断に迷った受験者が多かったと思われる。

問6 貿易についての二事項判別問題。G A T Tの目的を理解していないと判断に迷ったかもしれない。

問7 ヨーロッパ統合について、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。戦後のヨーロッパ統合の過程についての正確な知識がないと答えられない。

問8 ソ連が占領していたベルリンの地区について、地図から選択する問題。a～cをどの国が占領していたかを判別することは難しいが、dがソ連の占領地域であることは基本事項であり、容易に判断できる。

問9 欧州連合の共通通貨について、正しい語句を選択する問題。基本的な内容であり、容易に解答できる。

第2問 世界史における家族や社会集団について

世界史における家族や社会集団に関連して、Aは遊牧民と農耕地域の社会、Bはインドにおける系譜の作成、Cはアメリカ合衆国の奴隷制についてのリード文をもとに出題されている。社会経済史の占める割合が高いが、出題内容は基本的な事項であり、全体的な難易度は標準である。

問1 モンゴル帝国について、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。いずれも基本的な事項であり、容易に解答できる。

問2 漢人社会について、正しい文を選択する問題。それぞれの時代の社会情勢についての正確な理解がないと判断が難しい。

問3 世界史上の有力者層についての二事項判別問題。a・bとも基本的な内容であり、正誤は容易に判断できる。

問4 ヴァルナ制度について、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。いずれも基本事項であり、容易に解答できる。

問5 支配者について、二事項判別問題。aのカロリング家断絶後の選挙王制についてはやや細かく、判断が難しい。

問6 グプタ朝時代の文化について、誤った文を選択する問題。古代インドの文化について正しく理解していなければ、判断が難しい。

問7 アメリカ合衆国の奴隷解放に関して、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。いずれも基本事項であり、容易に解答できる。

問8 アメリカ合衆国の労働者の歴史に関する二事項判別問題。アメリカ労働総同盟が結成された時期について判断するのは、受験者には難しかったかもしれない。

問9 アメリカ合衆国で女性参政権が認められた時期について、年表から選ぶ問題。参政権を得た背景に第一次世界大戦中の女性の社会進出があることを理解していないと判断できない良問である。

第3問 歴史上の国際関係

歴史上の国際関係について、Aは16世紀のヨーロッパ、Bは戦争の違法化、Cは香港について述べたリード文をもとに出題されている。全てが政治史に関する設問であり、全体的な難易度としては標準である。

問1 16世紀後半のヨーロッパに関して、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。即位した年代やカトー＝カンブレジ条約との関連からフェリペ2世を選ぶことはやや難しいが、文章の後半の情報から判断できた受験者が多かったと思われる。

問2 スペイン内戦についての二事項判別問題。スペイン内戦をめぐる情勢について正確に理解していないと解答できない。

問3 外交の歴史について、正しい文を選択する問題。選択肢はいずれも基本的な内容であり、容易に解答することができる。

問4 19世紀末から20世紀初頭の国際関係について、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。いずれも基本的な事項であり、容易に解答することができる。

問5 第一次世界大戦の講和条約について、正しい文を選択する問題。①②④は時代が異なっているため、③が正答であることは容易に判断できる。

問6 ニュルンベルク国際軍事裁判が行われた時期を年表から選ぶ問題。戦後処理としての裁判の性格を理解していれば、容易に解答できる。

問7 中華人民共和国の対外関係について、三事項を年代順に並べる問題。bの中ソ国境紛争の時期について、正確に理解していなかった受験者が多かったかもしれない。

問8 1990年代の出来事について、誤っている文を選択する問題。インドとパキスタンが90年代に核実験を行ったことを正確に理解している受験者は少なかったかもしれない。

問9 マカオを領有していた国名について、正しい事項を選択する問題。基本事項であり、容易に解答できる。

第4問 世界史における過去の認識のあり方

世界史における過去の認識のあり方について、Aはイスラーム教、Bはソ連、Cはフランス

におけるユダヤ人迫害についてのリード文をもとに出題されている。政治史に関する設問が多く、全体的な難易度としては標準である。

問1 ムハンマドがイスラーム教徒の共同体を建設した都市の位置について、地図から選択する問題。メディナの位置は基本事項であるが、普段から地図を利用して学習していないと判断に迷うかもしれない。

問2 イスラーム神秘主義を表す正しい語句を選択する問題。基本事項であり、容易に解答できる。

問3 理想化された過去との対話に関する、二事項判別問題。人文主義についての正しい理解ができていないと判断が難しい。

問4 ロシアの君主による過去の理解と、それを基にした新政策について、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。「長いあごひげのそり落としを命じた」という表現にとまどったものの、それに続く首都の建設に関する文から正答を導けた受験者が多かったと思われる。

問5 歴史書とその著者について、正しい組合せを選択する問題。ローマの文化についてあいまいな理解だと判断が難しかったかもしれない。

問6 ドイツが第一次世界大戦前に支配した植民地について、正しい事項を選択する問題。マーシャル諸島がドイツの植民地であったことを理解していた受験者は少ないと思われる。

問7 世界史上の迫害や抑圧について、誤っている文を選択する問題。いずれも基本的な内容であり、容易に解答できる。

問8 第二次世界大戦中のフランスについて、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題。いずれも基本事項であり、容易に解答できる。

問9 パリ＝コミューンの樹立が宣言された時期について、年表から選択する問題。やや細かな年代に絞られており、bとcのどちらが適当か迷った受験者が多かったのではないかと推察される。

4 試験問題の表現・形式

「世界史B」は今年度も昨年度と同じく、大問4問で構成されていた。それぞれの大問は、家族や社会集団、国際関係など歴史を考える上で比較的理解しやすいテーマを取り上げており、そのリード文も読みやすいものであった。特に第4問のリード文は、過去の認識のあり方と映画の関係を示す例を複数取り上げ、「夜と霧」の一場面の写真を用いるなど、工夫されたものであった。また、リード文と設問の関係についても、昨年度同様、両者の関連性を意識しながら多様な時代や地域を扱おうとする配慮が見られた。

地図を利用した問題は2問出題された。地理的条件に関連付けながら歴史を理解させるという学習指導要領の趣旨にそった出題であったが、都市や占領地域の位置について解答するだけにとどまっており、工夫の余地があると考えられる。

事項（語句）を選択する問題は、昨年度の5問から9問に増加した。その中には、第1問・問9の「ユーロ」や、第4問・問2の「スーフィズム」のように、常識や基礎知識を問うだけの問題が見られた。歴史的思考力を培うという学習指導要領の趣旨に照らして、一問一答式の出題については一考を要すると考える。また、年表から正しい時期を選択する問題が3問出題されたが、その中

で第2問・問9は、アメリカにおける女性への参政権拡大の時期を、第一次世界大戦中の女性の社会進出と関連づけて考えさせる良問であった。一方、第4問・問9は、パリ＝コミューン樹立の時期を、スエズ運河開通という関係の薄い出来事の前後から選ばせるものであった。単なる年代暗記問題としないためにも、年表を用いる際には、設問との関連性に配慮していただきたい。

複数の事項（語句）の組合せから選択する問題は昨年度の13問から19問に増加した。その中で、空欄に当てはまる語句の正しい組合せを選択する問題が9問あり、出題形式のバランスが求められるところである。

5 要 約（総合的な評価）

今年度の「世界史B」は、地域別の出題率でみると「西欧・北米」が高く、分野別では「政治史」が高かった。また、時代的には「現代史」が高く、その内「戦後史」が9題であり全体の問題数の4分の1を占めている。近現代史重視の流れは理解できるが、昨年度に比べて地域や分野、時代に偏りが見られると言わざるを得ない。昨年度の本委員会で、戦後史に関する基本的な知識を問う出題がなされるよう要望したことが反映されたものと考えるが、学校現場では学習指導要領にそい、地域・分野・時代のバランスを考慮した授業を行っており、この点に配慮した出題をお願いしたい。

本年度のセンター試験における「地理歴史」の「B」科目の平均点は、「世界史B」が68.38点、「日本史B」が66.32点、「地理B」が69.68点であった。科目の選択によって有利不利が出ないよう配慮されており、出題にあたった諸先生方のご尽力に感謝したい。今後の問題作成に関しては、昨年度同様、受験者の歴史への興味関心を引き出し、歴史的思考力を育てるに適した問題を出題していただきたい。

全体としては、基本的事項・事柄を中心にした問題構成であり、教科書の内容をしっかり理解していれば十分に対応可能なレベルであったと言えよう。「世界史」は、科目の特性上、取り扱う地域が広範であり、設問に難易を付ける作業は大変であると推察でき、6割程度の平均点になるような問題作成がなされていることについては、あらためて諸先生方の努力に敬意を表したい。最後に、前文でも触れたように、「世界史B」の受験者数が減少傾向にあり、「世界史離れ」が進んでいる傾向は否めない事実である。こうした中で、センター試験は、高等学校の授業に大きな影響を与え、指針になるという一面もあるので、来年度以降も、教育現場に示唆を与えるようなテーマを工夫していただきたいと思う。また、今年度同様、地理歴史のB科目間での平均点に大きな差が出ないようお願いしたい。